関連国際学会の報告

第57回アメリカ口腔内科学会 (AAOM) の報告

藤 林 孝 司

The Report of 57th Annual Meeting of the American Academy of Oral Medicine

Takashi FUJIBAYASHI

第57回アメリカ口腔内科学会 (American Academy of Oral Medicine: AAOM) は2003年4月30日 (水) から5月3日 (土) の4日間にわたってアリゾナ州のツーソン (Tucson) において行われた。アリゾナ州の南部でメキシコ国境に近い砂漠地帯の中のオアシスの町で、ロサンジェルスから飛行機で1時間20分のところであった。会場はHilton Tucson Eastというホテルで、参加者はおよそ200名程度で、日本からは獨協医大、鹿児島大、自治医大などから約10名であった。この学会は例年そうであるが、会場はポスター以外の口演発表はすべて一つの会場 (ホテルの会議室) で行われるので、参加さえしていればすべての発表を聞くことになり、コーヒープレイクも十分にとってあるのでゆっくりと時間を過ごすことができる。

第1日目は午後1時に会長であるDr. Jack Appelbaumの開会の挨拶から始まり、ついでScientific programとして5時まで一人10分の一般口演発表が途中30分のコーヒープレイクを挟んで20題ほどがあった。話題としては粘膜類天疱瘡の基底膜に対する抗体、口腔癌25年間の疫学監視調査結果、化膿性腺性口内炎、高齢者における粘膜病変の生検、小児における骨髄移植後の粘膜炎80例の分析、Proliferative verrucous leukoplakiaの悪性化危険因子、白板症の薬物療法の無作為プラセボ対照二重盲検の第2相試験、顔面痛の薬物療法の評価などがあり、日本からは獨協医大後藤聡先生のシェーグレン症候群診断におけるガム試験の意義に関する発表があった。5時からはペンシルベニア大学Michael Glick教授によるBioterrorismと題する微生物によるテロの可能性について医学的内容の教育講演があった。午後6時半からはホテルのプールサイドで会長主催のレセプションが8時ごろまで開かれた。

獨協医科大学口腔外科学講座 (客員教授: 藤林孝司)
Department of Oral and Maxillofacial Surgery,
Dokkyo University School of Medicine
(Prof. T. FUJIBAYASHI)

第2日目の5月1日 (木) は午前中の8時から11時までコーヒープレイクを挟みながらDiagnostic science in medicineと題してアリゾナ大学医学部心臓血管内科教授Dr. Gordon EwyによるDiagnostic tests for cardiovascular diseasesと題する講演と、アトランタのリウマチとスポーツ医学の内科医Dr. Gary MyersonによるDiagnostic tests for autoimmune diseasesと題する講演、アリゾナ大学医学部免疫微生物学助教授Dr. Dominick DelucaによるHuman diabetes in a test tube: development of an organ culture system that mimics type 1 diabetes and its use to screen potential therapiesと題する講演の3つがあり、それぞれに質問や討論の時間もたれた。これらはOrganization of teachers of oral diagnosis lectureと名前がついているのであるが、もちろん参加者全員が聞いており、アメリカのoral medicine専門医がこのような広い分野の最新の医学知識をいつも吸収しようとしている姿勢が窺われる。11時15分から1時間3人演者による症例提示と病理を含めたCPCがあった。12時15分から1時間はテキサス大学サンアントニオ校Oral Medicine教授のDr. Geza ThrethzhalmyによるClinical Laboratory Testingと題する講演があり、その後ランチタイムとなった。午後はScientific Sessionはなく、Oral Medicine Program Directors MeetingやResident Meeting with American Board of Oral Medicineなどの会議がもたれた。そして夕方6時30分からはプールサイドでスナックとワインによる簡単なレセプションが行われた。

第3日目の5月2日 (金) は朝7時からパンとコーヒートの簡単な朝食をしながらAAOMの総会行事があり、その後8時からDiagnostic science and oral lesionsのタイトルのもとに2つの講演。1つ目はテキサス大学サンアントニオ校一般歯科教授Dr. Spencer ReddingによるLabo-

ratory Testing to Facilitate Diagnosis and Treatment of Oropharyngeal Candidiasis というものでカンジダ症に対するいろいろな臨床検査法について詳しい解説があった。*Candida albicans* が主体であることに変わりはないが、最近では *C. glabrata* や *C. dubliniensis* が HIV 患者や放射線治療患者、高齢者では増加しており、fluconazole に耐性になり易いので注意が必要とのことであった。2 つ目はテキサス大学サンアントニオ校口腔診断学教授の Dr. Martin Thornhill による Research, is it changing our approach to diagnosis to common oral inflammatory diseases? と題するものであったが、その内容は口腔扁平苔癬における T cell の浸潤の機序を RANTES, $TNF\alpha$, $IFN\gamma$ などのサイトカインの働きを細胞接着因子の発現との関連で解析した最新の研究結果を提示するもので、筆者にとってはきわめて刺激的な内容で強い感銘を覚えた。OLP のみでなく再発性アフタについても $IL-1\beta$, $IL-1R$ antagonist, $IL-6$ などとの関係から遺伝的素因についても言及があった。ブレイクの後、10時から午前中のもうひとつの課題は Diagnostic science and oral cancer と題するもので2つの講演があった。1つ目はカリフォルニア大学サンフランシスコ校 Oral Medicine 教授の Dr. Sol Silverman Jr. によるもので Challenges in Oral Cancer and Premalignancy と題して口腔粘膜前癌病変や初期癌の肉眼診断、細胞診、組織診、免疫組織診などの進歩が、2

つ目は南カリフォルニア大学 Oral Pathology 教授の Dr. Roy Eversole による Molecular Mechanism and Markers for Carcinogenesis と題して口腔癌の分子診断や遺伝子診断に関する最新の研究内容の講演があった。ついで11時15分からは12時15分までに1時間 Dr. Samuel Charles Miller 賞の受賞記念講演としてケンタッキー大学 Oral Medicine 教授の Dr. Graig Miller による The Ying and Yang of Herpes Simplex Virus Infection: Role in disease and cancer treatment と題する講演があり、HSV に関する極めて詳しい研究結果の発表があった。午後は雑誌編集委員会の会議のみで一般はオフとなった。この日は夕方7時から Dinner の夕食会があり、各種受賞者の表彰、若手研究者の優秀賞の表彰などが行われた。

4日目の5月3日(土)は7時から9時まで朝食をしながらの会員の総会パート2、9時から13時までは Diagnostic science and forensic odontology とのセッションで The art and science of identification in forensic dentistry のタイトルのもとに法歯学に関する講演2つとパネル1つが行なわれ、4日間にわたる学会が終了した。

来年の 58th AAOM の 2004 年学会は Florida, Key Biscayne の Sonesta Beach Resort において4月20日から24日まで行なわれることになっている。詳細は www.aaom.com にてご覧下さい。